

『申楽談儀』所引不明謡小考

「とりわき神風や……」と「融通鞍馬」

竹本 幹夫

世阿弥の芸談である『申楽談儀』第十段「文字訛り・節訛り」の条に、次のような謡の引用があり、従来典拠不明とされてきた。

「とりわき神風や、はじめたてまつり、

「たて」と当る、悪し。

これにつき『世阿弥・榊竹』頭注は、「途中を省略した引用か」とされたが、まさにその通りの詞章が番外曲「融通鞍馬」の〔クセ〕に存在する。以下『談儀』の引用が「融通鞍馬」に基づくことを論じたい。

「融通鞍馬」は『能本作者注文』『自家伝抄作者付』に曲名が記載されるが、演能記録等は管見に入らず、従来ほとんど注目されることがなかった。曲名は九州大学本『能楽自家伝抄』によれば仮名書きで「ゆづう」とあり、「ゆうづう」ではないらしい。宮城県図書館伊達文庫蔵下掛番外謡百番本（本曲は上懸節付）により、該部分を含む詞章を掲出しよう（適宜読点を付し、漢字を宛てた）。

〔サシ〕（シシ）我聖人の悲願を受け、三千世界を三日の内に飛行し、（地謡）神祇冥道ならびに三世の仏名残りなく、この巻物に記す、頂礼弥陀大覺世尊無量寿仏、

今日域に来迎引接、其名を良忍聖と名付け奉る。

〔クセ〕群類の衆生を、西方極楽に、引接せんと誓ひ、融通の名帳を、和国にひろめ給へば、諸仏も擁護し、諸天も納受す。取りわき日域は、神国なれば大小の、神祇感応を垂れ、融通の名帳に載り移り、五衰三熱を助く、（シテ）とりわき神風や、（地謡）伊勢五十鈴川、清き流れに影映る、天照おほん神を、はじめ奉り、六十余州の、神祇冥道は残りなく、王城の鎮守には、稻荷祇園賀茂貴布根、八幡大菩薩、本地は弥陀の御誓ひ、此念仏に御納受、善哉也善哉とて、名帳礼し奉る。

〔ロンギ〕（地謡）さて其後は地獄道、無縁無悪の、十王に至る迄、此名帳に入るとかや、…（以下略）

「融通鞍馬」は融通念仏の開祖である大原の良忍聖をワキとし、前シテは鞍馬の毘沙門天の化身、後シテは毘沙門天の本体が登場する複式夢幻能で、次のような構造を持つ。

1 ワキの登場（自己紹介〔名ノリ〕）
2 シテの登場（鞍馬の里男、結縁を求め良忍

を訪問〔名ノリ〕〔着キセリフ〕

3 ワキ・シテの応対（大原の描写と念仏の賛嘆〔問答〕）〔サシ〕〔下ゲ哥〕〔上ゲ哥〕

4 応対の続き（上人を鞍馬に招請〔問答〕）

〔掛ケ合〕〔上ゲ哥〕

5 シテの中入（シテは名帳を賜り諸天を勧進

することを述べ、毘沙門天の化身と名乗り消

える〔問答〕）〔中上ゲ・クリ哥〕

6 ワキの待ち受け（奇瑞の出現〔上ゲ哥〕）

7 後シテの登場（毘沙門天来現〔一セイ〕）

〔ノリ地〕

8 シテの仕事（毘沙門天の三日間の諸神勧進

〔サシ〕）〔クセ〕〔ロンギ〕

9 結末（続き。地獄の閻魔王以下、悪鬼に至

るまでが名帳に記名〔ノリ地〕）

この構成と前掲の詞章を見る限り、「とりわき神風や…はじめ奉り」の文句を含む後場の曲舞は〔ロンギ〕〔ノリ地〕と内容的に全く一連で、毘沙門天による諸天勧進の説明の一部をなす。曲舞が独立の謡物ではなく、完曲の一部として制作されたものであることは明らかである。すなわちこの曲は世阿弥時代から存在していた可能性が極めて強いのである。

本曲の小段構成はやや特異で、第一・二段は短いセリフのみ、逆に前場のワキ・シテ応対の段が二段からなり、第五段の中首で出る

クリ歌というのやや特殊、要するに『談儀』所引記事がなければ、世阿弥と同時代の作風とするのが憚られるような構成であると見えるかもしれない。

しかしながら本曲の詞章、「大原の里は爰なれや、物淋敷もかくれずむ、さんと山あつて山尽きず、路中に道多ふして道極りなし、きはもなく上もなき、弥陀光明の強力にて」(第三段・傍線部へ熊野)に同句を所引)とか、「古山(孤山?)」がたる雲の上、寿福円満の声みり、錦の御帳かけまくも、忝なやな悲願の御声、称名の御法、後夜の鐘の音、響きぞまさる、実相の嵐」(第七段・傍線部「寿福」はへ高砂)、「後夜」はへ西行桜)に類句あり)など、『談儀』に言及されるだけあって、文章自体はさほど悪くない。必ずしも作風は安直ではないのである。

この曲は『融通念仏縁起絵』に見える、鞍馬毘沙門天が良忍に結縁し、諸天を勧進して良忍の融通念仏の名帳に大小神祇の名を記し、良忍に捧げるといふ有名な説話を能にしたもので、この説話は『融通念仏縁起絵』のクライマックスでもあった。しかも室町中期の融通念仏中興の祖ともいふべき良鎮は、永徳二年(一三八二)頃から応永三十年(一四二三)頃の間盛んに布教活動を行い、初めは肉筆の縁起絵を多数制作して諸国に勧進し、

明徳二年(一三九一)頃と応永二十四年(一四一七)頃にはそれを版行して諸人に頒布したが、版本縁起の詞書は貴僧高僧を煩わせ、又高級武士の奉加をも得たという(梅津次郎『絵巻物叢誌』所収「版本の絵巻物」他)。まさに世阿弥時代は融通念仏の最盛期でもあったわけで、そのような時代背景が、融通念仏宣伝用の曲と言ってもよいような、本曲を生み出したのであろう。

ところが角川書店『日本絵巻物全集』所収の翻刻によれば、鞍馬の毘沙門天が勧進した諸天諸仏の名帳に、本曲にはある「貴布根明神」の名がないし、本曲の詞章には『融通念仏縁起絵』の詞書からの引用と確認できる表現がない。毘沙門天の化身が良忍を鞍馬に招請するという設定も能に独自のもののようである。直接典拠は現存する縁起絵ではないのであろう。ただし詞章自体には工夫もあるので、原典の丸写しではなく、作者の作文能力はかなり高いと見てよいのではなからうか。

能に融通念仏を題材とする作品は、観阿弥の得意曲へ嵯峨の大念仏の女物狂の物まね)以来少なくなない。これら一群の念仏物との関連など、典拠の問題のみならず考究すべきことは多いが、それらは後考に譲りたい。

(早稲田大学教授)